

### 与論島の活性化のために

与論島にとっての活性化とは具体的に何を表すのかを考えたところ、今回の集中講義から1、財政は地方化交付税や国庫支出金でほとんどを賄っており自主財源が少ないこと2、少子高齢化が進み人口が減少していること3、自然現象により農水産業が安定していないことという3つの問題点を踏まえ、与論島における活性化とは、1、自主財源の確保、2少子高齢化に歯止めをかけ人口増加させることを表すと考えた。

与論島の主な産業は観光業である。百合が浜を代表とする観光スポットも多く飲食店も充実していることもあり観光客の人数は大型台風の影響を受けた2012年の50,681人から2016年には70,871人まで増加した。しかし、1978、1979年の観光客15万人を超えたときにあったゴミ処理や飲料水の問題や老朽化、台風の影響による宿泊施設の減少や交通アクセスの問題などもあり、観光客増加への対策に力を入れるべきだと考える。ゴミ処理、飲料水の問題は、現在は施設を作ることに対応しているとあったが観光客がゴミを出さないようにお店などでの包装などにも目を向けることが必要だろう。宿泊施設は将来観光客が増加することを考えると早期に改装、新築を行うべきだろう。しかしコーラルホテルなど大規模なホテルが台風により使えなくなっていることから優先順位として収容数の多さより災害への強さを考えたほうが良いと思う。一案として空き家となっている家を改築して使うという方法もある。また小規模にすることで観光客同士ではなく島民との交流が増え与論特有の人の良さを知ってもらいきっかけとなりリピーターも増えると考える。交通アクセスについては茶花以外の場所に行く時が主に不便だと感じた。与論島自体が周囲約23kmの小さい島なので鹿児島市のレンタサイクル「かごりん」のシステムを真似ると、島のところどころにレンタルポイントを置くことも可能だろう。観光業を盛んにさせることで、与論島のことを多くの人が知り、定住人口の増加や雇用の拡大につながり自主財源も増えると考えられる。

また、茶花にはミコノスと姉妹盟約を結んだことにより青や白の建物が目立つが、その他の場所では昔からの家も多くあり、どちらも魅力的なのだが、観光客の多くは海やミコノス風の建物に目が行きがちであると感じた。また、島には多くの史跡が残っていることは観光客だけでなく島民も知らないだろうと感じた。そして、島民には当たり前となっている島ならではの十五夜踊りなどのイベントも多く存在しているので、それらを知ってもらうための取り組みも行うと良いと思う。例えば、古民家を使って郷土料理を作ったり、ユヌフトゥバを使った語り部を開いたり、小規模な史跡ツアーを行ったりするなどだ。また現代は核家族化などにより地域のつながりが薄くなっている地域が多いため島全体で行う運動会や綱引き、駅伝大会などは他の地域から見ると珍しく、魅力を感じる人も多いのではないかと考える。そこで人数が集まるのであればそのようなイベントに島外枠を作るなどして島外から来た人も参加できるような仕組みを作ると、島の温かみを知ることができたり、定住を考えている人が定住したあとの生活を想像しやすくなったりするというメリットがあると考えられる。また、現在多い学生の観光客だけでなく、2、30代の観光客も見

込めると考える。

与論島最大の観光スポットである海は百合が浜が大きな注目を浴びているが与論の海岸は場所によって砂浜や流れが様々で、泳ぐ、砂浜を歩く、写真を撮る、魚を見る、浜でバーベキューをするなど目的によりそれぞれ適している場所があるように感じる。しかしそれぞれの海岸がどのようなかを知るための写真やマップなどはないため有名な海岸にしか人が集まらないように思う。マップを作り海について説明をすることで与論島のいろんな面を知ってもらえることができると思う。また、与論島には海の家のような場所が少ないためご飯を食べる際一回着替えなければならないことも多い。海の家を夏の間開業することで雇用も生まれ、観光客にとっても気兼ねなく泳げるのではないだろうか。

以上が私の考える与論島の活性化に対する意見である。